
流れ流れ、咆える！

Suerte

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流れ流れ、咆える！

【Zコード】

N4419S

【作者名】

Suerte

【あらすじ】

神のミスでもなく、事故でもなく、かと言つて自然死でも、病気でもなく。

ただ、いつの間にか異世界に転生した青年の物語。

彼はこの地で、何を成す。

・・・・と、かつてよく書きましたが、やる一歩きたいです。W

1 彼は如何して生まれたのか

突然だが、本当に突然だが、俺は、転生者だ。

こんな話をしても、信じる奴はいないだろ？

転生など宗教か、でなければ、漫画や小説やゲームの中の話なんだから。

他人にそんなことを言つたたところで、現実とファンタジーの区別もできない馬鹿と笑われるか、

酷ければ、無言で通報ボタンを押されるかもしれない。

だが、だが、それが、実際に起こったんだ、仕方ないだろ？

はじめは何かの夢だと思ったさ。

俺は別に病気だつたわけでも、死ぬような年でもなかつた。

かと言つて、なら事故にあつたのか、それも違つんだよ……。

ただ、いつも通り、学校が終わつて家に帰り、パソコンでゲームをし、

小説を読み、予習と復習して寝た。

な？実際に平凡だらう？どこにも転生につながる要素なんて無い！

……ところが、だ。

田がさめたら「ドッコイー、俺は見知らぬ天井を見上げてたってわけだよ。

そして、俺を覗き込む金髪の女性。

そして、その横に、強面のおっさん。

当然ながら知らない顔だ。

彼女い年齢の俺だ金髪の、それも飛びきりの美人を知つてゐるわけが無い！

強面のおっさんも同じだ。

……言つて悲しい……。

だが……正直、ここまでは、俺が寝てる間、何らかの理由で意識を手放して、

運ばれた病院の看護婦さんとお医者さんだと思つていた。

いや、思いたかったよ……。

後から思つて、どうして看護婦などと思つていたが出来たのか。

当事者の俺も悩んでしまつて、おかしい考えだつたのだが。

だが、友よ！、目覚めてイキナリ、見知らぬ場所だぜ？

現実逃避ぐらい許してくれ。

それに……、そんな俺の現実逃避も、あつさり終わっちゃったんだよ……。

：目の前の、俺を覗き込んでる女人の人とおっさんか（後で母と、父だと知ったよ）が、

俺がまったく聞いた事も無い言葉で俺に語りかけて来たときにな
。

「ライルちゃん！ボーッとしてどうしたの？」

母さんがあの時と同じように、笑顔で俺を覗き込んでくる。

金髪が少し揺れた。

いかん、見惚れちまつた！

……相変りず今年で35になる人とは思えねえぜ。

外見も性格も若すぎるよ、母さん……。

未だに母さんを狙う奴らの気持ちがわかる気がしてきた……。

もつとも、俺と親父の鉄壁ガードが、守っているがな！

「あー、ライルちゃん……またお母さんの年のこと教えてたんでしょう！」

笑顔から一転、頬を膨らませ嘔吐母さん。

「おー、やばい！…………」母さんも、年の話をされるのを嫌がる。

俺や親父がうつかり口にするど、今見たく無い若干涙を浮かべ、頬を膨らませ声を上げるのだ……。

まだまだ、気にする事ない年なのに……。

母さん曰、女の子は皆、若老にかかるず、仮にしている物らしい。

やつして、自分にいつも気を配り美しさを保つと努力する事こそ、

女を女たらしめていくのだ。

と、力強く言われた、それはむかへ、殺氣をも感じられた。

そして、今、田の前で類を懸りさせたこの外見年齢は二十三歳だ。

まつりつて・・せば、可愛い。

マザコンになりかけた……ハツー？ かりし、俺！ 黙田だ！ 黙田だ！

色碧碧空・空碧是色一、觸一、

よし落ち着いた、

「 もーー何とか言ひてよーー そんなことを言えるライルちやん

は……こりだー！

だが、母とさせ、やつぱりと。

むかさん

俺の頭を両手でロツクし……自分の胸に押し当てせがつた。

……ぐああああああ？！

な、なな、な？！

俺の精神を、いつも簡単に乱すだよ？！

何と言ひ凶器だ……！

意識が追いつかない。

顔が熱い、そして恐らく俺の顔は真っ赤だ！

「どうだつまいつたか!、母さんよ、まだ若い!若いのおお！」

そして、そんな俺などお構い無しに、母さんはそういうのがどうに強く俺の頭をその凶器で締め付ける。

い、
いかん！、このままでは……いろいろな意味で死ぬ！！

「わはつてゐる!、わはつてゐるかは!」のままだと死ぬつて!、ギブ!
ギブ!

それは、もう、必死で謝つたさ！

前世の友人のうち一人が、女の巨乳に顔を埋めて見たいと言つてい
たが……。

これは、精神的にも肉体的にもきつ過ぎる！

いやね? 気持ちよかつただけど。

「くおらああアアーー!、ライルウウウウーー!人の嫁と……イチャつ
くんじやあ……ねえええええええーー!」

ドゴオオオオオオオオ!

「いつてええええーー!?」

突然の衝撃に声を上げ、地面を転がる俺。

あ、頭が砕ける…………!

(つたく……誰だよ?ー!)

怒りながら起き上がるとそこには、

「誰つて……ハルケギニアーの伊達男にしてー愛しの我が妻ミリア
のただ一人の旦那にして!」

我が馬鹿息子、つまりお前のー素敵で格好いいお父様である、グラ
ンツたあ俺のことよおー!」

親父がいた……相変らず暑苦しい。

と言つか、イキナリ息子ぶつ飛ばしてそれかよ?ー!冗談じやねえ!

後、心を読むな。

後、誰がバカだゴルアア!

「おこ、親父!..」これは何のつもりだ?、ああん?..」

怒りを乗せて叫ぶ、最近家に帰つてこな」と思つたら

拳をプレゼントとはなんだよおい!

「つむせえーお前が、人の嫁とイチャつくからだろーがー!ニアは俺のだ!」

おい、嫉妬かよ!嫉妬で久しづりに会つた息子をぶん殴つたのかよー。

大体アレのどこがいけやついてたつて言つんだ、アレはただの……、
いやつこじるよつに見えなくもないな、ウン。

母さん年に比べ若すぎるんだよ……。

だが、だからつてなアー……。

「息子の頭を……ただの拳でもなく鍊金で作った鉄製ガントレット
で固めた拳で殴る親がいるかあああ!..」

ド「オオオオ!..

「あやあああ!..」

フウ、殴り返してやつたぜ!

スクエアの土のメイジが、本氣で鍊金で作った物で、

殴るなよ、まったく……ただでさえ馬鹿力なのに！

……ああ、そう言えば、紹介が遅れたな。

俺の名は、ライル、フルネームは、ライル・ド・レイネスト。

母さんの名はミリア、フルネームは、ミリア・レンハールト・ド・レイネスト。

親父の名は、グラント、フルネームは、グラント・ファーレン・ド・レイネストだ。

この名前で解ると思う。

そう、俺が転生したのは、ゼロの使い魔の……トリステイン王国の、存在しないはずの……レイネスト伯爵家だ。

1 彼は如何して生まれたのか（後書き）

こんにちは、Suereteです。

皆様の名作ssに触発され、未熟ながら筆を執りました。

未熟なりに楽しんでいただけるように頑張りますので、

よろしくおねがいします。

アドバイス、指摘等よろしくお願ひします。

・・・・・あまりに厳しいと、泣きます。

男ですがwでは、またお会いしましょw。

4月14日、少し内容を追加して、修正を加えてみました。

4月16日修正2です。

ごめんなさい、2話は書いては消すを繰り返します・・・。

グランシセさんはつむぎかけましたw w

寡黙な人の予定だったのにw

2話、口論をして初陣の予感？

「まあか殴り返されるとは……イテテツ」

「当たり前の馬鹿……くうう……」

「もう、一人とも一喧嘩は、めつーだからね?」

オッス、前回の最後を馬鹿親父との殴り合いで終えたライルだ。

あのあと、横で見ていた母さんに一人とも説教を食らってしまった。

それも、ただの説教じゃ ない……正座しての説教だ。

ただでさえ殴られた所が痛いのに、足の痺れにまで耐えなければならぬなんて、

地獄以外の何者でもなかつたよ……。

腰に手をあて怒る母さんは何と叫つか若く見えた」ともあつて、

可愛いのかつたんだが、少しでも視線をそらせば、すかわざ雷が落ちた。

普段のほほんとしてるから、こいつときは怖いんだよなあ……。

ウン、やつぱり母さんは怒りせりや駄目だ、これは間違いない！

「それはそうと、あなた お仕事はもう終わったの?」

「ああ、もう大丈夫だと思うぜ?、徹底的に叩いたんだ、もう当分は襲つてこねえだらうよ!」

と、考えていると、スッカリいつも通りの雰囲気に戻つた母さんが、

久しぶりに会えたからか、一人とも満面の笑顔だ。

と言つても、3日ほどなんだがこの熱々夫婦には30年くらい経つたようを感じるんだろう。

まったく……結婚して、もう10年だつてのにねえ……、ま、夫婦仲がいいのはいい事だ。

みてると楽しい夫婦だし。

さて、親父が家を空けることになつた理由、それはレイネスト領内の村の一つを、

オーク鬼が襲撃してきたからだ。

オーケ鬼と言うのは、巨大で知能が低く集団性があり、おまけに人を食う化け物だ。

まあつまりは、一般的なファンタジーのオーケその物つてわけさ。俺は、まだ見た事は無いが、多分想像通りの姿なんだろうなあ。

だが、ここで一つ疑問ができた。

「だが親父、オーク鬼を相手にしたにしては、

時間が結構掛かつたな何かあつたのか？」

これが、俺の疑問だつた。

親父は身内だから言つわけじゃなく純粹に強い。

土のスクエアメイジなんだから強いのは当たり前かもしれないが、

親父は土メイジの中でも特に強い。

その理由は親父の思考にある。

親父は、魔法こそ全てと言つ考えを持つていない。

魔法が幾ら強くとも、接近されれば弱く、魔力が切れたら何もできない、

だから魔法を過信してはいけない。

魔法だけでなく、体も鍛え、あらゆる状況に対応できなければ、

魔法が使えなくなつたとき成すすべなく死んでしまう。

これが親父の、そしてレイネスト家の考えだ。

なので、親父はメイジと思えないほどマッショである、それはもう見事なまでに。

それもただのマッショじゃない、イケメンのマッショなのだ！

そして、そんな親父の戦闘スタイルは、やはりそ鍛え抜かれた体を生かした接近戦。

そうだ、メイジなのに接近戦が大得意なんだよ、ウチの親父は。

しかもただの接近戦じゃない、冒頭みたく、心血を注ぎ鍊金した鉄で作つたガットレットをつけて、殴るんだ。

だからついた二つ名が、ズバリ、鉄拳、実に親父らしいぜ……。

アレは、本気でやつたら鉄塊も碎くだらうな……。

とまあ、長々と語つたわけだが、要約すると、親父は凄く強いって事だ。

で、今回オーケーク鬼の群れが現れた村は、ウチの屋敷から相当近い。馬車で精々1時間も揺られてれば到着だ。

それに、村を襲うオーケーク鬼の群れは大体はあまり大きくない。

精々10匹来れば多いほうだ。

奴らは頭が悪いから、人間を舐めきつている。

だから、村一つ襲うのに大きな戦力は使わない。

それにだ、親父は一人で村に向かつたわけじゃない。

何人か親父の部下を連れて行つたんだ。

オーク鬼一匹が、手馴れの戦史任に匹敵するとはいへ、親父は土のスクエア。

部下の人たちも全員何らかの系統の、ライン トライアングルのメイジだ。

たがだかオーク鬼十数匹倒すのに、3日も掛かるとは思えない。

「それがなあ、奴ら、50匹以上来やがつたんだ

小さい村を襲うのに50も来るとは思つてなくてな

少數で行つたら、ちと遅れちまつたぜ！」

「おいおい、なんだよその数は！

多すぎるだろうそれ、親父無事だつたのか？」

幾らなんでも数が多すぎるだろ？50つてなんだよ50つて！

何で、村一つ襲うのにそんなに来るんだ！

「ハツ！、俺様を誰だと思つてやがる！、グラント様だぜ？

オーク野郎の100や200、問題ねえよ！」

そつとつて、豪快に笑う親父。

はは、心配するまでも無い、か。

まあ、親父を倒すなら……かの烈風さんを連れてくるか、

……母さんの、”あなたなんか大嫌い！”攻撃しかないだろうなあ。

……後者が情けなすぎるぜ……。

今日もレイネスト家は平和だった。

だが、俺はこの後起いりこことなど、予想もできなかつた。

まさか、俺の初陣の時が迫つてるとはねえ……。

2話、口算そして初陣の予感？（後書き）

いかがでしたでしょうか。

第2話です。

消してはかき消しては書きを繰り返し、

やっと投稿できましたw

最後にあるように次話、つまり3話から6話くらいまでせ、

戦闘になりますw

また投稿速度は亀になると思いますが、ゆっくりと待っていてください
されば幸いです。

それでは、読んでくださって有難うございました。

閑話1、彼の鍛錬風景

親父が帰ってきた次の日、俺は庭で土で作られた親父特製の案山子を相手に、一人鍛錬をしていた。

ウチの庭、結構広いから鍛錬場所には困らなくていいねえ……。

「せこつーはつーふつー！」

バコツー！バコツー！バコオオ！

目の前の案山子めがけて、大きく踏み込み、顔面左ストレートから頭への右フック、そして、顎への左アッパーへとつなげる。

硬い。だが、手ごたえは十分！

「はあ……つー！」

ドコオー！

続けて、左アッパーの体制から腕の角度を変え、拳を案山子の頭上に振り下ろす。

チヨツピングルレフト、とでも言おうかね。

今の一撃で案山子の首の部分が折れたのか、だらりと下がった。

「フウツー！」

息を短く吸い込み、バツクステップで後ろに大きく下がる。

案山子と俺の距離は……恐らく2メートル弱！

「慣らしは……終りだア！」

ダダダダッ！、ド「オオオ！

叫びと共に前へとダッシュ、一気に案山子に迫つそのまま、左拳でだらりとしている案山子の顎にアッパーを入れ、またバツクステップで距離を取る。

だらりと下がっていた頭が、今度は後ろのほうに曲がってしまった。

距離は、またも2メートル弱。いや、こりじゃあ2メイルだったか？

「クリエイト・ゴーレム！」

そして唱えるのは、土のスペル、「クリエイト・ゴーレム」の呪文だ。

文字通りゴーレムを作る呪文で、俺の一番得意な呪文でもある。

ゴーレム……ゴーレム……！

俺が呪文を唱えると同時に軽く揺れる地面。

そして土が競りあがつて行き、やがて人の形を作る！

完成したのは一体の石の「ゴーレム」、大きさは大体185CMぐらいだろうか。

俺の背が165CMだから大体それくらいだろう。

ゴーレムは、スッと、俺の傍に並び立つ。

ちなみに、俺は土のラインだ。

10歳でラインなのは結構早いと思う。親父が土のスクエアだから、土の系統はよく伸びるんだよな。

で、ゴーレムだが、原作でギーシュが才人と決闘した時は、青銅のゴーレムをつつ作っていたが、

俺はあえて土で、それも一体だけ作っている。

青銅とかでもできる」とはできるし、ギーシュより多く出せるが……。

疲れるんだよ、物凄く疲れる。具体的に言つて、精神を召喚したゴーレムの分だけ、

分けるといえばいいかな?、そんな感じなんだ。

だから、物凄く疲れる。大事な事なので一回言いました!

もう一つはあまり作りすぎると反応が鈍ってしまうと書いた事。

精神を分けるわけだから当然一つの脳で複数のゴーレムに指示を出

さなければならず、

細かい指示を出すとなると、気が遠くなるような数の事を、一つの脳で考えて、

それをこれまた複数のゴーレムたちに正確に指示しなければならな
いんだよ！

どんな地獄だつて話だよ……ああそいつをー、ラインになつて初めて
ゴーレム作つたとき、

調子に乗つて作りすぎたら、指示を出さうとしただけでぶつ倒れた
やー。

だから俺が作るのは一体だけだ。

だがしかあしー、一体だからって舐めて貰つちやあ困るー

こいつは、俺の最高傑作、そこらのゴーレムとはわけが違つ。

まず形、普通ゴーレム、それも土のゴーレムは、

からうじて人形を保つてるだけの物がが大半だ。

だが俺のゴーレムは、ちゃんとした人の、正確にはマッチョマンが、
両手にはガントレットを着け、下半身にのみ鎧を着たような形だ。

そして一つ目の違い、それは！精緻さー。

無駄に拘つた結果、顔のパーツや表情、そして全身の筋肉に至るま

で、精密に再現されているので！

三つ目の違いは、速度。

無駄な装甲をそぎ落とし、素早いスピードを得ることができた。

上半身裸なのはそのためだ。

最後の違いは精密なコントロールだ！

作る「ゴーレム」を一体に絞った事で、どんな指示にも即座に反応し、あらゆる状況に対処できる。

さりとて、ゴーレムに母さんの絵を描かせ続ける訓練によって、精密な手の動きを身に着けた。

言つなれば、精密動作性Aと言つておひつー。

そして、これは違いとは言えないかもしないが、このゴーレムは、拳の部分が非常に硬い。

これは、このゴーレムがパンチを主力とする接近戦用だからだ。

他の部分の強度は少し低い物の、土俵に、速度は少し遅いが回復できる。

こいつを操つて、もしくはこいつと共に敵を殴るのが俺の戦闘スタイルだ。

と言つても、まだ実戦に出た事は無いから、どうまで通用するかは

わからないんだけどな。

ちなみに、俺の杖は鉄のガントレットだ。

7歳のとき親父が作ってくれたもので、ガントレットの形を要求したのは俺。

原作でワルドやらにやらが、剣の形をした杖を使ってたから、ならガントレット形のものにけるだろ?と思つて頼んだり出来た。

杖が腕と一体化するため、よほどの事がないと奪われる事もないし、指の動き一つでゴーレムに指示を出せる。

そして、他の魔法も、詠唱は必要だか、相手を殴りながら発動可能といつ優れもの。

杖なのは左手の奴で、右手には杖じゃないけど同じ形の奴を着けている。

親父が作った物なんだ、殴つたら痛いだろ?なあ……案山子も凹みまくつてるじ。

……メイジがこれでいいのかねえ……いいか、親父もアレだし。

ツと、考えが長くなつちまつた。

左手の指で、半分ぐらいい壞れかけてる案山子をゆっくりと指差す。

ダツ！

瞬間、ゴーレムが案山子に向かつて駆ける。

そして。

「ホシ！」

田にも留まらないパンチラッシュを受けて、案山子はひとつづつ派手にぶつ壊れた。

「やれやれだぜ……」

氣分は勿論条 郎だ！、すきなんだよＪ×Ｊ。

「あれにて、今日は終了!」

俺は、壊れた案山子の残骸を片付けて、家に戻った。

関話1、彼の鍛錬風景（後書き）

いかがでしたでしょうか番外編。

ハイ、番外編です w

主人公の能力説明でした。

ライルは、バリバリのインファイターです。

作るゴーレムも、近接特化のインファイターです。

殴ります、とにかく殴ります。

だからといって他の魔法が使えないのですが w

実は、案山子を殴る前に、両脚に重りをつけて庭を走ったりします。

ぶつちやけ、この s s、このゴーレムを使つた話を書いつと想つて
始めました w

ですので、これからも多分接近戦主体です。

それでは、読んで下さつて有難うございました。

アドバイス等、お待ちしています。

では！

4月1~8日内容微修正です。

いまさらですが杖ガントレットは、原作に出てきません。

と書つか、殴り合いをするメイジなんていいたら怖いです

3話、朝の怒氣大爆撃と、初陣確定！

その知らせが届いたのは、親父が帰つてから一週間が経つた朝のことだった。

その日も俺は、朝食を食べ終えた後、屋敷の庭でゴーレムを使った鍛錬をしていた。

案山子殴りに始まり、ゴーレムを「シントロールしながらのランニング。

ゴーレムを使った風景画描きなどなど、挙げればきりが無いメニューをこなし、

汗を拭きながら呼吸を整えていると、親父が庭に出てきた。

「おーおー精が出るじゃねえかライルよー！」

今日もスマイル熱（苦し）いな、親父よ……。

しかもや……、何で上半身裸なんだよ？！

あんた仮にも、この国の伯爵様だらうが……。

あれか？、とうとう発病したのか？、露出病が。

「置いて置くが、俺は露出癖なんて無え！、ただ、俺も朝の鍛錬を

しゃつと思つただけだ！

俺の心が伝わったのか、大声で言つ親父。

じゃあ、あなたの鍛錬する時の正装は、上半身裸なのかよ！

メイジだらうが、あなたは……普通の杖あるのに拳で殴るのが主戦法の段階で、何も言えないか。

……までよ？」の理屈だと、同じくガントレット方の杖で殴り、ゴーレムで殴る俺も……考えのをやめよ。」

「あら あなた 今日も遅しいわあ、素敵よ 」

と、母がこれまで二つの間にか出てきていた。

ウソトコとした表情で親父を褒めている。

いかん！、バカップルの惚氣タイムが始まっちゃった！

まずいぞ……爆撃に備えないと、砂糖を吐いて死ぬ！

「まつまつまつまつだらうやつばつばつアにてはわかるよなあー。」

母さんの言葉に氣をよくして笑う親父。

そのまま、ボディビルのようなポーズまで決める。

うへえ……見るに堪えん……。

「ええ、勿論！、だつて……愛する旦那様ですものー・キャツ！恥ずかしい！」

と、親父の言葉に答えて、超絶に恥ずかしいセリフを言つた後、

イヤンイヤンー、と体をクネらせる母さん。

うわあ……完全に始まつてやがるよ……。

一話以来に言ひナビわあ、母さん今年で35だぜ？

でもつて、親父は37、結婚10年目だ。

なのにはなんだ？、この新婚丸出しバカツプルは？！

「「愛の力だ（よ）……」

……一人して、心を読むなアア！！

と、こんな馬鹿をやつてた時、一羽の鳥が飛んできた。

そして、その鳥は親父の指に止まつた。

鳥をよく見ると、足に何かがあつた。それは……。

「こつあ……手紙か？」

「うやううこの鳥はウチの伝書鳩みたいだ。

ウチは、全ての領地内に、この伝書鳩を、育て、管理する所がある。

緊急時にいつでも連絡できるように、親父が創つたものだ。

その伝書鳩が飛んできたって事は……。

「こりゃあ……何かあつたな、取り合えず手紙を見てみるか……。

そう言つて、親父が鳩の右足に巻かれていた手紙を開く。

そして……手紙の内容を見た親父の目が見開かれた。

「何てこつた……！、オーハ鬼の奴ら、またあの村に攻めて来やがつたのか！、しかも今度は70匹以上だと？！、「冗談じゃねえ！」

「何ですつて？！、本当なの？あなた……！」

母さんも顔を青くして驚いていた。

まさになんてこつた……！、前回より上の数だと？！

オーハ鬼め……一体どうなつてるんだ！

親父の顔は、怒りからか赤くなつていた。

当然だわつ、一度ならず、一度も自分の領地を攻められたんだ。

そう言つて、いる領地の人々を家族のよつて思つてはいるんだ。

そんな人々が住む村を荒されて、怒らないわけがない！

「ああー、本当だよ……ー、奴らめ……ー今度こそ、徹底的に叩いてやるー！」

まるですぐこでも飛び出す勢いの親父。

だが、前の討伐で親父の部下達は大半が怪我を負つてゐるはず……。

どうする氣だ……？ 親父……。

と、考へてゐる俺に、親父は驚くべきことを言つた。

「ライル！、お前も知つてるとおり……俺の部下達は前の討伐で怪我をしたやつらが多すぎて、無事な奴は2人ぐらいだ！、俺を入れたとしても3人！、70の数を相手にするのはきつい！、だから……お前もこいー！」

「あなたー、それはー！」

俺もオーク討伐に、か……いつか実戦に出る時が来るとは思つてたが……。

初実戦にしちゃあ、規模がでか過ぎるぜ……ー

だがー、俺も親父の息子ー、ライル・ド・レイネストだ！

母さんは、心配してくれてるが……。

領地の人々は家族同然！行かないつて選択は無い！

「ああ！、俺も親父の息子だぜ？家族の危機に、助けにいか無えつて手は無い！」

俺は、力強く答える。俺の力がどこまで及ぶかは解らない。

だが、限界まで力を出し切つてやる！

「駄目よライル！、危なすぎるわ！」

母さんが、必死に俺を止めようとする。

その両目に涙が溜まり、今でも泣き出しそうだ。

本当に俺のことを心配してくれているのが、ヒシヒシと伝わってくる。

確かに危ないだろう。親父と親父の部下2人がいても、

俺含めたつたの4人、70のオーク鬼を相手取るのは幾らスクエアの親父がいても、難しそぎる。

村人への被害を出さないようにならがら戦うとなると、さらに厳しい。

ひょつとすれば、死ぬかもしれない。親父は問題ない、仮にもスクエアだ、簡単に死にはしないだろう。

だが、俺は実戦に出た事の無いラインメイジ、一步間違えれば、確実に、死ぬ。

それでも……それでも……！、俺は……！

「それでも、行かなきゃならないんだよ、母さん……」

「ライルちゃん！」

ヒヒヒヒの母さんの皿から涙が零れる。

まつたく……普段はのほほーんとしてるのにねえ……。

母さんを安心させるために、最大限不敵に笑つて見せる。

「大丈 夫だつて！、俺を誰だと思つてるんだよ、母さんと親父の息子だぜ？、

死にや あしなないさ」

俺が、そつ言ひつと、親父も俺の意図を理解したのか豪快に笑う。

「ハハハ！そつともー、こいつは愛するお前と俺の子だ！絶対に無事で帰つてくるさー！」

俺と親父の言葉に、母さんは元気を取り戻したのか、母さんはいつもの穏やかな笑顔を浮かべた。

「む、やつぱり、母さんは笑つてないとなあ！

「分かつたわ……でもライルちゃん？絶対無事で帰つてきてね？、約束よ！、もし怪我なんかしたら、泣いちゃうんだから！」

「……そりゃきついねえ、こりゃ怪我もできなくなつちまつた。

「これは責任重大すぎるやつ、俺！」

「ハツハツハ！ ライル！ こりやあ、マジで責任重大だぞ？ アツハツハツハ！」

さて！、ソロソロいくとするか！、手紙によると部下たち2人はもう先に向かつてるらしい、

俺たちも、遅れないよう、今回は馬車じゃなく俺のランドに乗つて行くぜ！ ここ！、ランド！」

ランドと言つのは親父の使い魔のランドアリゴンの事だ。

風竜、火竜、水竜に並ぶ地の竜で、風竜の様な飛行能力は無いものの、

圧倒的な防御力とずば抜けた脚力が生み出す圧倒的なスピードが武器だ。

こいつに乗れば、オーク鬼のいる村まで馬車で1時間の距離をわずか20分で到着できる。

前回の討伐では、数が多いことを知らなかつたから、馬車に乘つていつたみたいだが、今回は事情が違う。

部下さんは先に向かつているらしいし、急がないと！

親父の呼び声に答え現れたランドに乗つて、俺たちは村へと向かつた。

背中に、母さんの声を聞きながら……。

「ライルちゃん！、あなた！、待ってるからね！、どうか無事で！」

「ああ……！、もうひつんだ！」

3話、朝の怒氣大爆撃と、初陣確定！（後書き）

こんには。

S u e r t e です。

4話、いかがでしたでしょうか。

とうとう戦闘が発生します。

スケールが無駄に大きいです。

上手く書けるか心配でなりませんw

ですが、精一杯頑張りますので、よろしくお願いします。

では、読んで下さって有難うございました。

感想、アドバイスお待ちしております！

p.s：お気に入りが予想以上に増えてびっくりです。

本当に有難うござります。

p.s2：早速修正です。o_n_1

4 オーク鬼たちの王、現る！

「おいおい……なんて光景だこりや あよお……」

「オーク鬼め……荒しまくつてやがる！」

親父の使い魔のランドドラゴンに乗つて、連絡を受けた村の近くに到着した俺たちが見たのは、辺り一面が派手にぶつ壊れている光景だつた。完全に壊滅状態だ。

二人とも自然と顔を歪めてしまう。

ランドドラゴンのスピードでも遅かったのか？……クソッ！

自然と怒りが高まつてくる。奴らめ……許さねエ！

「だが……妙だな、オーク鬼どもは居やがるのに、村人たちの気配が無えな

血の臭いがしないところを見ると、皆殺しにされたつてわけでも無さそうだが……」

と、俺が怒りを募らせていると、親父が訝しげに呟いた。

確かに妙だな……これだけ派手にやらかしたつてのに、村人たちの気配がまつたくしないのは。

普通、オーク鬼達は、獲物を生かしておかないと聞く。

それは、奴らは人を食つ上に残虐だからだ。じっくりじっくり翻り殺しにして食つてしまう。

なのに血の臭いはまつたくしてこない。なら、村人達は、オーク鬼が来る前に逃げたのか？

いや、それはありえない。

うちの方に連絡が来たのは、村にオーク鬼が攻めてきた後のことだ。奴らが来る前ならともかく、いつたん70匹ものオークが攻めてきた後では。

訓練を積んだ兵士や、メイジでもない限り、逃げる事はできないだろつ。

なら……これは一体どういうことだ？

まさか奴らが、村人達を攻撃しなかつた？

そんなことがありえるのか……？

と、俺が悩んでいると、前方から、人の声とは思えない声が聞こえてきた。

突然の声にさすし驚き、声のする方にめを向けるとそこにいたのは……。

「オオオ!、コノアイダノ、ニンゲン、キタ!、ボスノ、イッタコト、ホントウダツタ!」

「コンド、ハ、シラナイ、ニンゲン、モ、イル!」

「なんだあ?!!、てめえらはよ!、つてオーク鬼が喋つてやがるだとお?!!」

「おいおい、マジかよ!、どんな突然変異だよ!」

「あ、あいつらは!、この前のやつらだな、だがそのときは喋らなかつたんだがな?」

なんと、喋るオーク鬼の集団だった。

おいおい、なんなんだよ一体!

聞いてねえぞ!、こんな当然変異がいるつてのは!

流石の親父もこれには驚いたのか、目を見開いて叫んでいた。
勿論、俺も物凄く驚いた。

約5匹ぐらいの奴らは、俺たちに近づいてきた。

予想外の事態に戸惑つてしまつた俺たちは、その接近を許してしまつた。

喋るオーク鬼をみて驚かない奴かいたら出てこいって……。
そして、その中で一番でかい奴（約220CMぐらいか？、他の奴
らは200CMぐらいだった。）が、

俺たちに、正確には親父に言った。

その内容は……。

本当に、予想外の物だった。

「オマエ、コノ、アイダ、ノ、ニンゲン！、オレタチ、ノ、ボスガ
オマエ、ニ、アイタガツテル！
ツイテゴイー！」

なんと、奴らの頭が、親父に会いたがつてゐるらしい。

親父……一体何をしたんだ？

喋るオークのボスが会いたがつてゐるなんて。

「……ハハッ！、クツハハハハハ！、なんだなんだあ？、喋るオー
ク鬼のボスが、
俺に会いたがつてゐたあ！……いいゼエ？テメエらにやあ、聞き
たい事がたんまりとあるんだよー！」

親父は、いつものように豪快に笑つてその誘いを受けた。
親父……罷つて可能性は考えてないんだろうなあ……。
まあ、仕方ないか、親父だし。

それに、俺も奴らには聞かなきや いけねえ事がある！

「おい、オーク野郎！、俺も行かせてもらひうぜ？、俺は、お前らのボスが会いたがってるこの男の息子だ、行く権利はあるだろう？」

そうつ言って、俺も奴らに笑つてみせる。

親父一人で行かせるわけには、いかねエセ！ すると奴はニヤリと笑つた。

「ホウ！ イイダロウ！、ヨクミレバ、オマエ、モ、ナカナカツヨソウダ

オマエモ、ボスニアワセタラ、ヨロコブダロウ！、ツイテコイタダシ、ソノトカゲカラハ、オリテモラウゾ

おーおー！、話が分かるやつだねえ。
それじゃあ、行つて見るか！
村を荒した、礼をしないとなあ！

「気をつけろよお？、こいつら、結構強いゼエ？
ボス級となりやあ、もつと強いだろうよ」

親父が、俺に耳打ちしていく。

ハ！、生半可な奴に負けられるか！
少なくとも、親父ぐらいは強くないとねえ。

そう言つと、親父は、

「ハツハツハ！、それでこそ俺の息子！」
と、笑つた。

「コノヒロバデ、ボスガマツテイル！」

奴らに連れられてやつてきたのは、この村の広場だった。
どういうつもりだ?、態々待つなんて……。

考へても仕方が無いので、言われるまま広場に入った。

そこにいたのは、大勢のオーク鬼達だった。
ざつと見ても65匹はいる。

俺たちをここまで連れてきた奴らを合わせると、
丁度70匹だ。

そして、その中で、一際異彩を放つ奴がいた。
残りの69匹のオーク鬼に守られる様に真ん中に立っていたそいつ
は、

他のオーク鬼と比べて小さかった。

俺のゴーレムと同じぐらいかそれより少し大きい。
そのぐらいの大きさだった。

だが、そいつは、他のオーク鬼とは違う雰囲気を持っていた。

まず、その肉体だ。

他のオーク鬼より小さいのに、奴の肉体は、他のどんな奴よりも鍛
え抜かれていた。

下半身に布を巻いただけの露出された筋肉は、端切れんばかりで、
背が小さいだけで、奴の体のパーツ一つ一つは、どんなオーク鬼よ
りもデカかつた。

次に、その顔。

他のオークたちと違つて、奴は豚つ鼻じゃなく、人間のよつたな鼻を
持つていたんだ。

その異常な体と、口からはみ出てる、鋭い牙が無ければ、オーク鬼

だと分からなかつただろう。

そして、何よりも大きな違いは、奴の喋る言葉は、他の奴らと違つて、カタコトじやなく、完璧な人の言葉だつたといつ事。

「よくぞ、よくぞ来られた、強き者よ！、我こそこのオーケ鬼達を従える王！、スルカだ！」

奴は俺たちを見ると、気迫のこもつた声で歓迎の意を表した。低音のその声は、霸気が込められていて、こいつがオーケ鬼達のボスであると、納得させるだけの威力があつた。

「よお！、ずいぶん歓迎してくれるじゃあねえか！、お前さんがこのボスだな？つて、もう自分で言つたんだっけか？ハハハ！」

それを聞いて親父が笑いながら軽口を飛ばす。奴の気迫にまつたく押されていない。まるで、古くからの友人に話してるようだぜ。土のスクエアは、伊達じやないつて事が。

「ハハハ！、そうだ！、もう一度言おう！オーク鬼の王、スルカだ、強き者よ！」

親父の言葉に答える奴は、笑つていた。
強い奴と会えて、うれしくて堪らない！
そんな表情だ。

こいつも、親父と同類かも知れん。
所謂、バトルジャンキーつて奴だ。

「む？、おお！知らぬ顔がいるな！、強き者よ、貴公の息子か？、父に劣らず、

強さを感じるぞ！、歓迎しよう！、もう一人の強き者よ！」

お、今度は俺かい！

奴は俺を見ると、親父のときみたいに笑った。
どうやら、俺も一目置かれたらしい。
あんな強そうな奴に褒められたんだ。

悪い気はしないねえ！

「ああ、確かに、こいつは俺の怠慢の息子さ、名前はライルだ、そして俺の名はグランツ！

強き者なんて呼ばねえで、名前で呼びやがれ、名前で！

と、奴の言葉に親父が言つ。

確かに、こつまでも強き者とか呼ばれるのはねえ……。

親父がそつ言つと、奴は再び笑つて言つた。

「つむ！、グランツにライルよ！、その名、しかと覚えた！

なんだか、オーク鬼とは思えない奴だぜ。

こいつ、もしかして、いい奴か？
いや、まだわからねえか。

「で、スルカさんよお、どうして俺の領地を襲つて、しかも、俺に会いたがつてたのか、説明してくれるか？、場合によつちやあ、ここで、戦う事になるかも知れねえからなあ！」

親父が、真剣な表情で言つ。

確かに、まずはその理由を聞かないと始まらない。

何故襲つてきたか、そして、何故態々呼んだのかを、だ。

親父の言葉に、奴も真剣な顔で語り始めた。

「うむ、まずは、貴公の領地を荒し、敗れたにもかかわらず、再び攻め入つた事を深く詫びさせて頂きたい！」

本当に申し訳ない、だが私にも理由があるのだ」

奴は、そう言つと頭を下げた。

「おいおい！、こんなオーケ鬼見たこと無いぞ？

どうなつてるんだ……？」

「おいおい、頭を上げてくれよ、じつちが困つちまつじやねえか

親父も驚いたらしい。

流石に親父も、人間に頭を下げるオーケ鬼なんて、見たこと無かつたようだ。

スルカは、感謝する、と言つて頭を上げると、また語りだした。

「私は元々、群れから離れ放浪をしていたのだ、私は群れの仲間達に比べ、この通り小さくてな、だが、それと引き換えに、人間の頭脳を手に入れることができた」

「だが、オーケ鬼の社会と言つ物は、そんな知能よりも大きさと力こそが全てだつた、

だから私は、仲間達からは落ちこぼれ扱いを受け、群れから追放された」

なるほどな……。

確かに、オーケ鬼達には、

頭のよさなんて何の価値も無いだろうな。

「幸い、私は体こそ小さい物の、力はむしろオーク鬼より強かつたし、知能もあつた、だから、放浪の途中で出会つた別のオーク鬼達と戦い、

私の群れを作つていつたのだ」

凄い奴だよ……。

ここまで集めるのに、一体幾ら戦つたんだ？

それに、こいつら、強い、間違いない。

そして、そんな強い奴らを従えるこいつは、間違いなくオーク鬼最強だろ？

「そして気がつけば70のオーク鬼の群れとなつたわけだが、そうなると当然、食べる物が必要になつてくる、沢山の食料がな！」

「どううな、これだけのオーク鬼達が食う量は、ちょっとやそつとじや、満たせない。

そして、その量は、狩や採取では達成できない。

そうなつてしまつたら……。

「だが悲しいが、我々だけで調達できる食料は限りがあつた、そこで私は人間達に狩で得た肉や毛皮を売り、それで得た金で食糧を買ったのだ

幸い、この牙を除けば人間と近い外見だつた私にはそれができた

「だが、それも長くは続かなかつた、ふとした事故で、

私がオークだと知られてしまつたのだ

そのうわさはすぐに、村全体に広がり、
もはや、食料を得る手段は狩だけとなつてしまつた

そう言うスルカの顔は悲しみに満ちていた。

「噂とは早い物で、瞬く間に私がオークだと周囲の村に知られてしまつたのだ

これでは、仲間達が飢えてしまう
やむを得ず、私たちは、略奪に手を出した
悪い事だと知つても、だ
もう、後は無かつた」

「そんな中ターゲットになつたのが、そう、貴公の領地だつたのだが、仲間達は敗れた、グランツ、貴公によつて！
本当なら、一度でも、誰かに敗れたならば、略奪はやめるつもりだつた

だが、仲間達に貴公の報告を聞き、私は考えたのだが
魔法を使う物なのに、魔法を使わず己の肉体のみで仲間達を圧倒したと聞いたとき、
思ったのだ！

この者になら、頼めるかも知れぬと！」

スルカの言葉は熱を帯びていた。

それは、仲間達を想う、
執念が詰まつているようだ。
そして……スルカは言った。

「貴公を男と見込んで、お頼み申し上げる！
ここで、私と戦い私が勝てば……食料を分けていただきたい！
仲間達が、飢えない食料を！」

4 オーク鬼たちの王、現る！（後書き）

こんには。

S u e r t e です。

4話、如何だつたでしょつか。

今回、最大のオリ設定が出ました。

そしてまたも、戦闘が有りませんw
まじすみません・・・次は必ず・・・

では、読んで下さつて有難うございました。

後、感想待つてますw w 絶対ですw

ではまたー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4419s/>

流れ流れ、咆える！

2011年10月7日13時28分発行